

大衆性低減を導く実践行為についての 探索的研究； 利他的行動が大衆性抑制に及ぼす影響

伊地知 恭右¹・原 文宏²・藤井 聡³

¹正会員 社団法人北海道開発技術センター 地域政策研究所
(〒060-0051 北海道札幌市中央区南1条東2丁目11番地)

E-mail: ijichi@decnet.or.jp

²正会員 社団法人北海道開発技術センター 地域政策研究所
(〒060-0051 北海道札幌市中央区南1条東2丁目11番地)

E-mail: hara@decnet.or.jp

³正会員 京都大学大学院教授 工学研究科都市社会工学専攻 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂)

E-mail: fujii@plan.cv.titech.ac.jp

先行研究においては、土木計画学における合意形成問題や景観問題をはじめ、多くの社会問題に対して否定的な影響を及ぼしている可能性のある個人の「大衆性」について、その低減を図る態度行動変容施策の一つである「良書の通読」が、一定の効果を有することが実証的に検証された。

本研究では、大衆性低減施策を検討するうえでのより実践的な示唆を得るために、良書の通読という個人完結型の行為ではなく、社会的な「実践行為」に着目し、大学生を対象としたアンケート調査を実施した。その結果、利他的行動として捉えられるボランティア活動の経験が、個人の「大衆性」を低減させる傾向が確認された一方で、大衆性の高い個人においては、むしろより一層大衆性を高めてしまう可能性があることが示された。

Key Words : *the vulgarity of the mass, prosocial behavior, volunteer activity*

1. はじめに

近年、土木計画の対象とする領域においては、違法駐車や交通渋滞等の種々の交通問題^{1),2),3)}を始め、伝統的な景観や街並みの衰退^{4),5)}、総論賛成・各論反対等の合意形成問題^{6),7)}に至るまで、様々な「社会問題」が深刻化しつつあることが指摘されている。

先行研究⁸⁾では、そうした社会問題はそもそも個人ひとり一人の態度や行動と深く関わり合うものであろうという認識の下、その背景にはとりわけ近代化における人々の道徳的頹廃があり、その根源には「大衆人」なる存在のあることに着目し、スペインの哲学者オルテガ(1883-1955)の著書「大衆の反逆」(1930)⁹⁾に基づいて、個人の「大衆性」という万人に共通する「心理的事実」を描出するために心理尺度を作成している。その結果、大衆性は「傲慢性」と「自己閉塞性」という二つの因子から構成されることが示されている。ここに、傲慢性とは「ものの道理や背後関係はさておき、とにかく自分自

身には様々な能力が携わっており、自分の望み通りに物事が進むであろうと盲信する傾向」を表しており、自己閉塞性とは「自分自身の外部環境からの閉塞性」を表す。そして、この2つの心理尺度を用いて、個人の「大衆性」がどのような社会的影響を及ぼすかについての検討が加えられており^{10),11)}、その結果、景観問題と公共事業を巡る合意形成問題について、人々の大衆性が否定的な影響を及ぼす傾向が示され、これらの問題の本質的課題の一つが、個人の「大衆性」という心理的傾向性にある可能性が指摘されている。

これに対し、筆者らは大衆性なる個人の非道徳的な心理的傾向性を低減・抑制することを目指し、その方途を探るために、態度行動変容施策の一つとして「読書」に着目した実験を行った¹²⁾。その結果、「良書の通読」が特に傲慢性の抑制において一定の効果有することが把握され、追加調査の中では、幼少期のしつけやコミュニケーションがこの抑制効果の持続性に寄与する可能性が示唆された¹³⁾。

このように、先行研究では個人の大衆性という心理的傾向を測定する手法が確立され、その負の社会的影響が実証的に示されたことから、大衆性低減施策を社会の漸次の改善を目指す一つの根源的な方途として位置づけ、「良書の通読」という行為にその可能性が見出せることが示されている。

しかしながら、前述のとおり、近代化とそれにともなう人々の道徳的頹廢、さらには個人の大衆化を、諸問題の根源的な一因として捉える以上、時間的連続性を有する人間の営みという“社会的行為”の中に、その処方箋を見出すことが重要であるのではないかと考えられる。つまり、近代化という時間と人間の営みの帰結であるところの現代における“社会的な実践行為”の中に、この大衆性抑制施策の在り処を見出し、その意義付けと方向性を与えることが必要であろうと思われるところである。むしろ、従来の解釈学研究から、「読書」は実際の経験の「疑似体験」となり得るものであるということが知られている (c.f. 藤井 聡, 長谷川 大貴, 中野 剛志, 羽鳥 剛史 : 「物語」に関わる人文社会科学の系譜とその公共政策的意義, 土木学会論文集F5, 67(1), pp. 32-45, 2011.)。この点を踏まえるなら、上述のように先行研究にて「良書の通読」が大衆性の抑制に有効であるということは、その良書が模写している“現実の体験”を疑似的にではなく実際に体験することを通じて、大衆性が抑制されることがあり“得る”であろうことが、十分に予期されることとなる。

ただし、どの様な体験であっても大衆性が抑制されるとは考えがたいところでもある。大衆性を抑制しうる体験もあれば、そうではない体験もあるであろうことが予期される。

については本研究では、大衆性を抑制しうる実践行為とはどういうものであるかを探索的に把握するための第一歩として、先行研究で示されている、大衆性と負の相関を持つ「利他性」という心理的傾向に着目し、これに起因すると考えられる実践行為であるところの「ボランティア活動」を対象とした調査・分析を行うこととした。

2. 利他的行動と大衆性に関する仮説

個人の利他的行動に関する研究、あるいはボランティア活動に焦点を当てた研究は、様々な分野において数多く蓄積されている^{14), 15), 16), 17), 18), 19), 20), 21), 22), 23)}。

例えば、坂野ら¹⁴⁾は、ボランティア活動への参加動機と満足感の関連について個人属性や諸心理要因を用いた分析を行い、ボランティアにおける便益を明示していくことの重要性を論じている。また、塚本ら¹⁵⁾は、環境ボランティア活動を「決定への参加」と「活動への参加」

に大別すると同時に、参加する個人のリスク（費用）やコミットメントの度合いに着目した段階分けを行い、参加・活動に関する多様な考え方を考慮した分析したうえで、円滑に活動を推進する上で個人属性による棲み分けが有効である可能性を示している。

これらは、ボランティア活動が社会的に意義深いものであるという認識の下、その時間的継続と空間的な広がりを目指すための理論的戦略を探索するものであると言える。

また、羽鳥ら¹⁶⁾は進化論の視点から、利他的行動の創発に関する分析を行っており、集団淘汰圧が存在するとう条件の下では、コミュニティ内において利他的行動が自発的に創発されるという可能性を理論的かつ数理的に示している。

このような、利他的行動、あるいはボランティア活動に関する研究は、少なくとも次のような認識において進められていると言えよう。

- ・利他的行動は存在し、伝播し得るものである。
- ・利他的行動は個人およびその周辺に対して、心理的にも社会的にも影響を及ぼし得るものである^[1]。

そして、このような認識の理論的背景は、態度行動変容施策の理論的背景である社会的ジレンマの見解においても、確認されることであり²⁴⁾、本研究の目的であるところの大衆性の低減を考えるうえで、重要な示唆を与えるものである。

つまり、信頼・知識・道徳意識とう3つの要因が協力行動の規定要因となることを踏まえれば、利他的行動の経験が、「利他的行動をしている人がいるという認識（信頼）」、「利他的行動の在り方に関する認識（知識）」、「利他的行動が求められており、自分はそれをすべきだ」という意識（道徳意識）」を醸成し、結果的に個人の利他的傾向を高めることが理論的に推察されるのである。さらには、大衆性と利他性の間に負の相関があるという先行研究の結果⁸⁾を踏まえれば、この利他的傾向の増加は、大衆性の低減という帰結をもたらす可能性すらも有するものと考えられるところである。

以上の論考より、利他的行動として捉えられるボランティア活動と大衆性低減の関係性について、以下のような「作業仮説」を措定することができるものと考えられる。

作業仮説 ボランティア活動という行為を通じて、 人々の大衆性が低減する

本研究では、この仮説を検証し、実践行為の中に大衆性低減策が存在する可能性を確認することとしたい。

表-1 大衆性尺度項目

<p>傲慢性尺度</p> <p>自分を拘束するのは自分だけだと思 自分の意見が誤っていることなどないと思 私は、どんな時でも勝ち続けるのではないか、と何となく思 自分個人の「好み」が社会に反映されるべきだと思 どんなときも自分を信じて、他人の言葉などに耳を貸すべきではないと思</p>
<p>自己閉塞性尺度</p> <p>伝統的な事柄に対して敬意・配慮をもっている 日々の日常生活は感謝すべき対象で満たされている 世の中は驚きに満ちていると感じる 我々は、伝統を受け継ぎ、改良を加え、伝承していく義務があると思 自分自身への欲求が多いほうだ</p>
<p>*score=7: 全く思わない〜どちらとも言えない〜とてもそう思う</p>

表-2 大衆性低減仮説測定項目

<p>傲慢性低減仮説測定項目</p> <p>ボランティアを経験して、「自分を拘束するのは自分だけだ」と思うようになりましたか？ ボランティアを経験して、「自分の意見が誤っていることなどない」と思うようになりましたか？ ボランティアを経験して、「私は、どんな時でも勝ち続けるのではないか」、と何となく思うようになりましたか？ ボランティアを経験して、人につきあう時には「謙虚さ」が重要だと感じましたか？ ボランティアを経験して、自分は人よりも高い能力があると、確信しましたか？</p>
<p>自己閉塞性低減仮説</p> <p>ボランティアを経験して、「伝統的な事柄に対する敬意・配慮を感じるようになった」と思いますか？ ボランティアを経験して、「日々の日常生活は感謝すべき対象で満たされている」と感じるようになりましたか？ ボランティアを経験して、「世の中は驚きに満ちている」と感じるようになりましたか？ ボランティアを経験して、人の話に耳を傾けることが大切だと感じましたか？ ボランティアを経験して、自分は我が道を行くべきなのだ、と改めて感じましたか？</p>
<p>*score=5: 全く思わない〜どちらとも言えない〜とてもそう思う</p>

3. 調査概要

(1) 調査対象者と調査実施方法

以上の仮説を検証するために、北海道医療大学および札幌大学の学生を対象としてアンケート調査を実施した。調査票の配布、記入、回収をすべて講義中に行ったところ、有効回答者 151 名を得た。そのうち、69 人が男性 (45.7%)、82 人が女性 (54.3%) であり、平均年齢は 18.91 歳、年齢の標準偏差 1.44 は歳であった。

(2) 調査項目

a) 大衆性に関する項目

本調査では、2 で掲げた仮説を検証するために、大衆性を測るための質問項目として、先行研究⁸⁾で提案された大衆性尺度のうち、傲慢性と自己閉塞性のそれぞれについて、特に寄与率の高い項目上位 5 項目を抽出し

表-1 に示すような 10 項目の質問を設定し、各項目について「とてもそう思う」から「全く思わない」の 7 件法での回答を要請した。なお、傲慢性尺度については対応する 5 項目の加算平均から、自己閉塞性尺度については対応する 5 項目のそれぞれを反転して上で求められる加算平均から、それぞれの尺度を構成した。それぞれの尺度の α 係数は、傲慢性について $\alpha = .71$ 、自己閉塞性について $\alpha = .66$ であった。 α 係数がやや低いものの、一定程度の信頼性が認められたため、これらの尺度を採用することとした。なお、「大衆性尺度」はこれらの二つの下位尺度の加算により算出した。

また、大衆性の低減仮説を直接検証するための質問項目として、表-2 に示すような傲慢性低減仮説項目、自己閉塞性低減仮説項目) 11 項目の質問を設定し、各項目について「とてもそう思う」から「全く思わない」の 5 件法で回答を要請した。なお、これらについても信頼性分析をおこなったところ、傲慢性低減仮説項目について $\alpha = .77$ 、自己閉塞性低減仮説項目について $\alpha = .79$ であった。

b) 利他的行動に関する項目

また、利他的行動と大衆性の関係性を把握するために、既往研究における利他的行動の規定要因について表-1 に示すような質問項目を設けた。それぞれの要因の意味は次のとおりである。

- ・社会的つながり：「ボランティア活動をすることにより、他者とのコミュニケーションを取ることができ、友人を得る機会が得られる。また、ボランティア活動をすることは、他者に好意をいだかれやすくなる」ことを表している¹⁷⁾。坂野ら¹⁴⁾は、そうした要因を「社会的つながり」と、西川ら¹⁷⁾は「社会適応機能」とそれぞれ呼んでおり、ボランティア活動への参加動機の一つであることを指摘している。

- ・感謝：羽鳥ら¹⁶⁾は、「利他的行動は、一般の人々が利他的行動に対して「感謝」をする傾向が強い地域ほど、発生しやすく、また、定着しやすい」という仮説を進化心理学の視点から理論的に導き、アンケート調査により、まちづくり活動や町内会自治会活動において、この仮説を支持する結果を得ている。

- ・人に喜んでもらえる：塚本¹⁸⁾は、ボランティア活動者への聞き取り調査を通じて、ボランティア活動を続ける動機として、社会や人の「役に立つことの嬉しさ」という点を挙げている。

- ・実行可能性評価：実際に行動を行うことが可能であるかどうかについての評価であり、環境配慮行動の行動意図が形成される過程において、実行可能性の評価が、行動意図の規定要因及び制約要因となり得ることが指摘されている^{19),20)}。

- ・対処有効性認知：「何らかの対処によって直面してい

表-3 利他的行動の規定要因の項目

項目名	内容
◆他者との関係に関する要因	
社会的つながり*	(以下3項目による尺度化) ・あなたの周りの人々は、「ボランティア活動」に対して、関心を寄せていると思いますか？ ・あなたの周りの人々は、「ボランティア活動」に携わる人を高く評価していると思いますか？ ・あなたの周りの人々は、「ボランティア活動」に携わることを、重要なことだと考えていると思いますか？
感謝*	「ボランティア活動」をしている場面、地域では、「ボランティア活動」に携わる人に対して感謝する傾向は、どれくらいあると思いますか？
人に喜んでもらえる①*	あなたの周りの人々は、あなたが「ボランティア活動」に携わることを喜ぶと思いますか？
人に喜んでもらえる②*	あなたが「ボランティア活動」に携わることで、関係する人々に喜んでもらえると思いますか？
主観的規範*	あなたの周りの人々は、「ボランティア活動」に携わることにに対して、賛成していると思いますか？
人間関係*	あなたは、「ボランティア活動」の中で、周りの人々との人間関係は良好であると思いますか？
手伝ってくれる人の存在*	あなたが「ボランティア活動」に携わるときに、手助けしてくれる人は、どれくらいいると思いますか？
◆自己に関する要因	
実行可能性評価**	あなたにとって「ボランティア活動」に携わることは、可能だと思いますか？
対処有効性認知**	あなたは、自分自身が「ボランティア活動」に携わることによって、実際に問題解決などに大きく貢献できると思いますか？
◆合理的要因	
便益の認知*	(以下4項目による尺度化) 「ボランティア活動」に関わることで、 ・「友人、ネットワークを得ることができる」ということをどの程度感じますか？ ・「自分の生き方に関する考え方が変わる」ということをどの程度感じますか？ ・「ボランティア活動」に携わるための技術・方法を学ぶことができる」ということをどの程度感じますか？ ・「自分が「ボランティア活動」に携わることで、事態が変わるかもしれないと思えるようになる」ということをどの程度感じますか？
便益の評価*	(上記の項目を「望ましい」と感じる程度についての尺度化)
費用の認知①*	あなたは、「ボランティア活動」に関わることで、「自分の自由な時間がなくなる」ということをどの程度感じますか？
費用の評価①*	また、「ボランティア活動」に関わることで、「自分の自由な時間がなくなる」ということが生じることを、望ましいことだと思いますか？
費用の認知②*	あなたは、「ボランティア活動」に関わることで、「仕事をこなすのが大変だ」ということをどの程度感じますか？
費用の評価②*	また、「ボランティア活動」に関わることで、「仕事をこなすのが大変だ」ということが生じることを、望ましいことだと思いますか？
費用の認知③*	あなたは、「ボランティア活動」に関わることで、「人間関係のストレスがある」ということをどの程度感じますか？
費用の評価③*	また、「ボランティア活動」に関わることで、「人間関係のストレスがある」ということが生じることを、望ましいことだと思いますか？
◆情緒的要因	
感情的安寧**	(以下5項目で構成される尺度) ・どんな嫌な気分ときでも、「ボランティア活動」に携わることによって、そのことを忘れることができると思いますか？ ・「ボランティア活動」に携わることによって、孤独感を感じないで済むと思いますか？ ・「ボランティア活動」に携わることによって、自分が他人よりも幸福であることの罪悪感が和らぐと思いますか？ ・「ボランティア活動」に携わることによって、あなた自身の個人的な煩わしいことから逃れられると思いますか？ ・「ボランティア活動」に携わることは、あなた自身の個人的な問題を解決するのに役立つものだと思いますか？
役に立つことうれしさ*	あなたは、自分自身が「ボランティア活動」に携わることで、人々の役に立つことに喜びを感じますか？
◆責任意識に関する要因	
責任感**	あなたには、「ボランティア活動」に取り組む責任があると思いますか？
◆その他の要因	
興味関心**	あなたは、「ボランティア活動」に興味がありますか？
時間的ゆとり*	あなたは、時間的に見て、どの程度ゆとりがあると思いますか？
経済的ゆとり*	あなたは、経済的に見て、どの程度ゆとりがあると思いますか？

*score=5: 全く思わない/全くない/全く感じない/全く望ましくない~どちらとも言えない~とてもそう思う/非常にいる/非常に感じる/非常に望ましい
**score=4: そう思わない/少しそう思う/思う~とても強くそう思う

る（環境）問題が解決可能かどうか」に関する認知であり、環境保全を目指す運動への参加の促進要因であることが確認されている^{19),20)}。

・費用（コスト）、便益（ベネフィット）評価：「費用・便益評価」は、ある活動に参加することによって「得られる個人的な利益、もしくは被る不利益」に対する評価である²¹⁾。安藤ら²¹⁾の調査では、環境ボランティア活動の継続意図に対して、「コスト評価」が負の影響を及ぼす要因として確認されている。そして、環境配慮行動の行動意図に影響を及ぼす要因として「コスト評価」、「ベネフィット評価」が存在することも示されて

いる^{19),20),21)}。また、元吉ら²³⁾においても、地域防災活動の参加意図を規定する正の要因として「ベネフィット認知」が、負の要因として「コスト認知」が、指摘されている。

・感情的安寧：「ボランティア活動に参加することによってネガティブな自己像やプライベートな問題といった脅威から自己を守ることができる」ことを表している¹⁷⁾。坂野ら¹⁴⁾はそうした要因を「感情的安寧」と、西川ら¹⁷⁾はこれを「防衛機能」とそれぞれ呼んでおり、ボランティア活動への参加動機の一つであることを指摘している。

・役に立つことうれしさ：塚本¹⁸⁾は、ボランティア活動者への聞き取り調査を通じて、活動を続ける動機として、「人に喜んでもらえる」という点が存在することを指摘している。

・責任感：環境配慮行動の規定要因として、「責任」帰属の認知が存在することが示されている^{19),20)}。例えば、環境汚染の「責任」が自分自身にあると考えれば、環境配慮的行動の行動意図が強められるものと予想されている。また、塚本¹⁸⁾は、ボランティア活動者への聞き取り調査を通じて、活動を続ける動機として、活動に携わることに対する「責任感」が存在することを指摘している。

・興味、関心：塚本ら¹⁵⁾は、一般市民の環境ボランティア活動への参加意欲や参加経験の規定要因、及び、ボランティア団体団体の地域行事への参加を促進する要因として、環境への「関心」を挙げている。また、元吉ら²³⁾の研究では、地域における防災問題に対する「興味・関心」が、地域防災活動の行動意図に影響を及ぼすことを示している。

なお、各要因のうち、尺度化を構成したものについて信頼性分析をおこなったところ、社会的つながりについて $\alpha = .81$ 、ボランティア活動における便益の認知と評価については $\alpha = .71$ 、 $\alpha = .73$ 、感情的安寧については $\alpha = .81$ であった。ボランティア活動における費用の評価・認知については、信頼性分析の結果 α 係数が低かったことから、個別の尺度として扱うこととした。

以上の既往研究における利他的行動の規定要因に加え、他者との関係に関する要因として、主観的規範、人間関係、手伝ってくれる人の存在に関する項目を設けるとともに、その他の要因として時間的、経済的なゆとりに関する項目を追加した。

4. 結果

(1) 大衆性低減仮説の検証

大衆性低減仮説の項目は、先述のとおり「全く思わない~どちらとも言えない~とてもそう思う」の5段階で設定されており、例えば「ボランティア活動を経験

表-4 大衆性低減仮説項目の平均値の検定結果

	N	M	SD	期待値(3)との有意差	
				t値	p値(両側)
傲慢性低減	ボランティアを経験して、「自分を拘束するのは自分だけだ」と思うようになりましたか?★	101	2.31	0.92	-7.53 .00**
	ボランティアを経験して、「自分の意見が誤っていることなどない」と思うようになりましたか?★	101	1.99	1.00	-10.10 .00**
	ボランティアを経験して、「私は、どんな時でも勝ち続けるのではないかと、と何となく思うようになりましたか?★	99	1.99	1.05	-9.53 .00**
	ボランティアを経験して、人ときあう時には「謙虚さ」が重要だと感じましたか?	101	3.99	1.08	9.20 .00**
自己閉塞性低減	ボランティアを経験して、自分は人よりも高い能力があると、確信しましたか?★	102	2.00	1.02	-9.86 .00**
	ボランティアを経験して、「伝統的な事柄に対する敬意・配慮を感じるようになった」と思いますか?	101	3.26	0.91	2.83 .01**
	ボランティアを経験して、「日々の日常生活は感謝すべき対象で満たされている」と感じるようになりましたか?	102	3.34	1.09	3.19 .00**
	ボランティアを経験して、「世の中は驚きに満ちている」と感じるようになりましたか?	102	3.28	1.11	2.58 .01*
	ボランティアを経験して、人の話に耳を傾けることが大切だ、と感じましたか?	102	4.15	0.84	13.84 .00**
	ボランティアを経験して、自分は我が道を行くべきなのだ、と改めて感じましたか?★	102	2.52	1.07	-4.54 .00**
ボランティアを経験して、自分の役割を考え、それを引き受ける事が大切だ、と感じましたか?	101	3.74	0.87	8.60 .00**	

★:逆転項目

表-5 大衆性と大衆性低減仮説項目の相関分析結果

		大衆性	傲慢性	自己閉塞性
ボランティアを経験して、「自分を拘束するのは自分だけだ」と思うようになりましたか?	Pearsonの相関係数	0.28	0.25	0.14
	有意確率(両側)	0.00**	0.01**	0.17
ボランティアを経験して、「自分の意見が誤っていることなどない」と思うようになりましたか?	Pearsonの相関係数	0.29	0.33	0.05
	有意確率(両側)	0.00**	0.00**	0.64
ボランティアを経験して、「私は、どんな時でも勝ち続けるのではないかと、と何となく思うようになりましたか?	Pearsonの相関係数	0.26	0.36	-0.03
	有意確率(両側)	0.01**	0.00**	0.78
ボランティアを経験して、人ときあう時には「謙虚さ」が重要だと感じましたか?	Pearsonの相関係数	-0.20	-0.18	-0.09
	有意確率(両側)	0.05*	0.08	0.35
ボランティアを経験して、自分は人よりも高い能力があると、確信しましたか?	Pearsonの相関係数	0.36	0.37	0.10
	有意確率(両側)	0.00**	0.00**	0.30
ボランティアを経験して、「伝統的な事柄に対する敬意・配慮を感じるようになった」と思いますか?	Pearsonの相関係数	-0.19	-0.02	-0.26
	有意確率(両側)	0.06	0.83	0.01**
ボランティアを経験して、「日々の日常生活は感謝すべき対象で満たされている」と感じるようになりましたか?	Pearsonの相関係数	-0.28	-0.17	-0.24
	有意確率(両側)	0.00**	0.10	0.02*
ボランティアを経験して、「世の中は驚きに満ちている」と感じるようになりましたか?	Pearsonの相関係数	-0.20	-0.09	-0.20
	有意確率(両側)	0.05	0.37	0.05*
ボランティアを経験して、人の話に耳を傾けることが大切だ、と感じましたか?	Pearsonの相関係数	-0.26	-0.15	-0.23
	有意確率(両側)	0.01**	0.12	0.02*
ボランティアを経験して、自分は我が道を行くべきなのだ、と改めて感じましたか?	Pearsonの相関係数	0.17	0.27	-0.06
	有意確率(両側)	0.09	0.01**	0.58
ボランティアを経験して、自分の役割を考え、それを引き受ける事が大切だ、と感じましたか?	Pearsonの相関係数	-0.12	-0.04	-0.13
	有意確率(両側)	0.23	0.66	0.19

して、「伝統的な事柄に対する敬意・配慮を感じるようになった」と思いますか?」(自己閉塞性低減仮説項目)という項目の平均値が、その中位値3よりも「思う」側にあれば、回答者は平均的に、ボランティア活動を体験することで、自己閉塞性が低減している可能性が示唆されることとなる。

そこで、各大衆性低減仮説項目の平均値と、中位値の差を検定した結果、表-4に示すとおり全ての項目で、中位値よりも望ましい方向、すなわち大衆性が低減する方向に平均値が位置していた。つまり、「ボランティア活動という行為を通じて、人々の大衆性が低減する」という作業仮説を支持する結果が得られたと言える。

(2) 大衆性低減効果の検証

一方で、先行研究においては、大衆性の低減の度合いが自己閉塞性の高さに影響を受けていることが示唆されている。そこで、大衆性尺度と大衆性低減仮説項目について相関分析を行った。

その結果、表-5に示すとおり、「ボランティアを経験して、自分の役割を考え、それを引き受けることが大切だ、と感じましたか?」(自己閉塞性低減仮説項目)を除く10項目で、有意が相関が見られた。つまり、傲慢性については、傲慢性が高い人ほど、ボランティア活動を体験して、「自分を拘束するのは自分だけだ」、「自分の意見が誤っていることなどない」、「私は、どんな時でも勝ち続けるのではないかと」思うようになり、「自分は人よりも高い能力があるのではないかと」確信し、「自分は我が道を行くべきなのだ」と改めて感じるようになる傾向にあり、自己閉塞性については、自己閉塞性が高い人ほど、ボランティアを体験しても「伝統的な事柄に対する敬意・配慮を感じるようになった」と思わず、「日々の日常生活は感謝すべき対象で満たされている」と感じるようにならず、「人の話に耳を傾けることが大切だ」と感じるようにならず、「人の話に耳を傾けることが大切だ」と感じない傾向にあることが示唆された。このことから、傲慢性の高い人はより一層傲慢性を高めてしまい、自己閉塞性の高い人は自己閉塞性が下がりにくいという可能性が示唆されたと言える。

そこで、大衆性低減の高低により、どのような差異があるのかを把握するために、傲慢性低減仮説項目の5項目と自己閉塞性低減仮説項目の6項目を、それぞれ尺度化し、それぞれの平均値をもって、大衆性(または傲慢性、または自己閉塞性)が高い群と低い群に分け、その高低による各心理指標や利他的行動の規定要因の相違について一元配置分散分析を行った。

その結果、表-6に示すとおり、傲慢性については、傲慢性が低減する傾向が低い人は、高い人に比べて、大衆性が高く、傲慢性が高く、周囲からの感謝を感じず、ボランティア活動に関わることで人間関係のストレスが生じることを厭わず、ボランティア活動に参加することによってネガティブな自己像やプライベートな問題といった脅威から自己を守ることができる(感情的安寧)と感じているという結果が、いずれも統計的に有意な水準で示された。

同様に、自己閉塞性については、自己閉塞性が低減する傾向が低い人は、高い人に比べて、大衆性が高く、傲慢性も自己閉塞性も双方とも高く、社会的なつながりを感じておらず、周囲からの感謝を感じず、人々が喜んでくれると思っておらず、主観的規範が低く、実行可能性の評価が低く、利他的行動による便益の認知

表-6 大衆性低減効果の高低による各要因の差

	大衆性低減項目の平均値						F 値	p 値	傲慢性低減項目の平均値						F 値	p 値	自己閉塞性低減項目の平均値						F 値	p 値
	低い群			高い群					低い群			高い群					低い群			高い群				
	N	M	SD	N	M	SD			N	M	SD	N	M	SD			N	M	SD	N	M	SD		
大衆性	48	3.09	0.66	50	2.48	0.52	25.43	.00**	54	3.02	0.66	45	2.49	0.55	18.86	.00**	46	3.05	0.68	54	2.57	0.59	14.43	.00**
傲慢性	48	2.93	1.14	50	2.13	0.76	16.85	.00**	54	3.00	1.06	45	1.94	0.65	34.59	.00**	46	2.75	1.13	54	2.35	0.92	3.88	.05*
自己閉塞性	48	3.24	0.98	50	2.83	0.69	5.92	.02*	54	3.04	0.91	45	3.04	0.81	0.00	.96	46	3.36	0.97	54	2.80	0.68	11.38	.00**
社会的つながり	48	5.56	0.81	50	5.63	0.95	0.16	.69	54	5.61	0.92	45	5.57	0.83	0.04	.83	46	5.40	0.86	54	5.71	0.91	3.06	.08
感謝	47	3.06	0.78	49	3.59	0.72	12.08	.00**	52	3.29	0.69	45	3.38	0.90	0.30	.58	46	3.01	0.78	52	3.60	0.71	15.38	.00**
人に喜んでもらえる①	48	3.31	0.83	49	3.76	0.92	6.15	.01*	53	3.34	0.90	45	3.78	0.85	6.09	.02*	46	3.41	0.83	53	3.62	0.97	1.32	.25
人に喜んでもらえる②	48	3.38	0.96	50	3.80	0.86	5.36	.02*	54	3.52	0.95	45	3.69	0.90	0.83	.36	46	3.17	0.90	54	3.91	0.83	17.91	.00**
主観的規範	48	3.71	0.90	50	4.16	0.87	6.43	.01*	54	3.93	0.89	45	3.96	0.93	0.03	.87	46	3.52	1.01	54	4.24	0.70	17.64	.00**
人間関係	47	3.53	0.83	49	4.18	0.78	15.69	.00**	52	3.85	0.80	45	3.89	0.93	0.06	.81	46	3.35	0.77	52	4.27	0.74	36.39	.00**
手伝ってくれる人の存在	48	4.17	1.36	49	4.29	1.21	0.21	.65	53	4.23	1.20	45	4.20	1.38	0.01	.92	46	4.07	1.37	53	4.32	1.19	0.99	.32
実行可能性評価	48	3.27	0.79	50	3.70	1.04	5.28	.02*	54	3.44	0.77	45	3.53	1.12	0.22	.64	46	3.35	0.71	54	3.63	1.09	2.27	.13
対処有効性認知	48	2.83	0.66	50	3.22	0.55	9.97	.00**	54	2.98	0.69	45	3.04	0.64	0.22	.64	46	2.87	0.58	54	3.17	0.64	5.85	.02*
便益の認知	48	2.19	0.73	50	2.30	0.86	0.48	.49	54	2.31	0.70	45	2.16	0.90	0.98	.32	46	2.11	0.77	54	2.37	0.81	2.73	.10
費用の評価①	48	3.30	0.67	50	3.96	0.61	25.67	.00**	54	3.60	0.71	45	3.68	0.73	0.27	.60	46	3.17	0.64	54	4.00	0.55	49.13	.00**
費用の評価②	48	3.44	0.60	50	4.07	0.64	24.27	.00**	54	3.73	0.70	45	3.79	0.69	0.20	.65	46	3.41	0.60	54	4.05	0.64	26.53	.00**
費用の評価③	48	3.42	1.01	50	3.34	1.12	0.13	.72	54	3.35	0.95	45	3.42	1.18	0.11	.74	46	3.48	1.03	54	3.31	1.10	0.59	.45
費用の評価④	47	2.53	0.83	50	2.46	0.89	0.17	.68	53	2.57	0.75	45	2.42	0.97	0.69	.41	46	2.43	0.89	53	2.57	0.82	0.59	.45
費用の認知①	48	2.85	0.95	49	2.94	1.11	0.16	.69	53	2.83	0.91	45	2.96	1.15	0.36	.55	46	2.85	1.07	53	3.00	1.02	0.52	.47
費用の認知②	48	2.77	0.81	49	3.06	0.83	3.07	.08	53	2.89	0.72	45	2.93	0.94	0.08	.78	45	2.67	0.85	53	3.11	0.75	7.60	.01**
費用の認知③	48	2.92	1.05	50	2.98	1.12	0.08	.77	54	2.89	0.96	45	3.02	1.20	0.38	.54	46	2.98	1.04	54	2.94	1.11	0.02	.88
費用の認知④	48	2.29	1.05	50	1.96	0.88	2.88	.09	54	2.44	1.00	45	1.76	0.80	13.84	.00**	46	2.15	1.05	54	2.09	0.92	0.09	.76
感情的安寧	48	1.57	0.64	50	1.62	0.51	0.21	.65	54	1.74	0.63	45	1.44	0.47	7.02	.01**	46	1.51	0.59	54	1.68	0.55	2.29	.13
責任感	47	1.96	0.75	50	2.22	0.93	2.32	.13	54	2.19	0.73	44	2.00	0.99	1.14	.29	45	1.98	0.78	54	2.19	0.89	1.48	.23
役に立つことにつれしき	48	3.46	1.09	49	4.24	0.80	16.39	.00**	54	3.80	0.98	44	3.93	1.09	0.42	.52	46	3.35	1.14	53	4.23	0.78	20.55	.00**
興味関心	48	2.35	0.89	50	2.72	0.95	3.88	.05*	54	2.67	0.93	45	2.40	0.91	2.04	.16	46	2.26	0.88	54	2.76	0.93	7.49	.01**
時間的ゆとり	48	2.58	1.11	50	2.46	0.91	0.36	.55	54	2.44	0.98	45	2.64	1.05	0.96	.33	46	2.63	1.12	54	2.48	0.93	0.53	.47
経済的ゆとり	48	2.25	1.10	50	2.20	1.05	0.05	.82	54	2.37	1.05	45	2.09	1.10	1.68	.20	46	2.20	1.07	54	2.28	1.07	0.15	.70

・評価が低く、仕事が大変になるというリスク（費用）を望んでおらず、人の役にたつことのうれしさを感じず、ボランティア活動に関する興味・関心が低いという結果が、いずれも統計的有意な水準で示された。

以上の相関分析、一元配置分散分析の結果から、大衆性（あるいは傲慢性、自己閉塞性）が低い人は、大衆性がより一層低減しやすいが、大衆性（あるいは傲慢性、自己閉塞性）が高い人は、大衆性が低減しにくいばかりか、より一層増長されてしまう可能性を有しており、利他的行動の規定要因についても、元来「望ましくない」形で有している可能性があることが示唆されたと言える。

5. 考察

アンケート調査の結果より、本研究の作業仮説が支持され、利他的行動であるボランティア活動の経験は、平均的に大衆性を低減することに寄与する可能性を有するが、一方で、元来の大衆性の高低によりその変化の大きさや方向性が異なる可能性があることが示唆された。具体的には、元来、傲慢性、自己閉塞のいずれか、あるいは総じて大衆性が低い個人は、ボランティア活動によって大衆性が低減される可能性が高いものの、元来、特に傲慢性が高い個人は、ボランティア活動によって、大衆性低減どころか、これを増加させる可能性が示唆されたものと考えられる。

なお、本研究では「ボランティア活動における、大衆性の低減、あるいは増長の規定要因」を明らかにできていないことから、今後この規定要因の抽出に関する追加研究が必要であり、それをもって「高大衆群の増長」とも言うべき事態への対処方途を検討することが必要であると考えられる。

いずれにしても、大衆性低減を促す行為として、ボランティア活動の経験、すなわち利他的な「実践

行為」が有効である可能性が示唆された一方で、特に大衆性の高い個人については、この種の利他的な「実践行為」によって、より一層大衆性を増加させてしまうという危ぶむべき示唆が得られた以上、少なくともボランティア活動についてこれを無差別に賞賛し、無秩序に推進することは避けるべきだと言わざるを得ないものと考えられる。

については、今後ボランティア活動をはじめとした実践行為の展開について議論する際には、この危険性を踏まえたうえで、より一層の慎重な姿勢が必要なものと思われるところである。

注

- [1] 繰り返しとなるが、本研究において大衆性の低減を日人間の営みの中における「実践行為」に見出そう試みたのは、このような「行為」が存在し、伝播するという信念がためである。

参考文献

- 1) 藤井聡：TDM と社会的ジレンマ—交通問題解消における公共心の役割—，土木学会論文集，No.667/IV-50，pp.41-58，2001.
- 2) 森川高行，田中小百合，萩野成康：社会的相互作用を取り入れた個人選択モデル—自動車利用自粛行動への適用—，土木学会論文集，No.569/IV-36，pp.53-66，1997.
- 3) 三木谷智，羽鳥剛史，藤井聡：心理的方略による放置自転車削減施策に関する実証的研究—東急電鉄東横線都立大学駅における取り組み—，第37回土木計画学発表論文集，2008.
- 4) 田中尚人，柴田久（編）：土木と景観—風景のためのデザインとマネジメント—，学芸出版，2007.
- 5) 柴田久，土肥真人：目的別研究系譜からみた景観論の変遷に関する一考察，土木学会論文集，No.674/IV-51，pp.99-111，2001.
- 6) 藤井聡：総論賛成・各論反対のジレンマ，In：土木学会誌編集委員会（編）：合意形成論—総論賛成・各論反対のジレンマ—，土木学会，pp.31-45，2004.
- 7) 藤井聡：「決め方」と合意形成—社会的ジレンマにお

- ける利己的動機の抑制に向けてー, 土木学会論文集, No.709/IV-56, pp.13-26, 2002.
- 8) 羽鳥剛史, 小松佳弘, 藤井聡: 大衆性尺度の構成ー“大衆の反逆”に基づく大衆の心的構造分析ー, 心理学研究, Vol.79, No.5, pp.423-431, 2008.
 - 9) ホセ・オルテガ・イ・ガセット: 大衆の反逆 (1930), (神吉敬三 訳), ちくま学芸文庫, 1995.
 - 10) 羽鳥剛史, 小松佳弘, 藤井聡: 政府に対する大衆の反逆ー公共事業合意形成に及ぼす大衆性の否定的影響についての実証的研究ー, 土木計画学研究・論文集, Vol.25, pp.37-48, 2008.
 - 11) 小松佳弘, 羽鳥剛史, 藤井聡: 大衆による風景破壊ーオルテガ「大衆の反逆」の景觀問題への示唆ー, 景觀デザイン論文集, No.6, pp.23-30, 2009.
 - 12) 伊地知恭右, 羽鳥剛史, 藤井聡: 内村鑑三『代表的日本人』の通読による大衆性低減効果に関する報告, 土木学会論文集 D, Vol.66, No.1, pp.40-45, 2010.
 - 13) 伊地知恭右, 羽鳥剛史, 藤井聡: 内村鑑三「代表的日本人」通読による大衆性低減の持続的効果に関する実験研究, 人間環境学研究, Vol.8, No.2, pp.169-180, 2010.
 - 14) 坂野純子, 矢嶋裕樹, 中嶋和夫: 地域住民におけるボランティア活動への参加動機と満足感の関連性, 東京保健科学学会誌, Vol.7, No.1, pp.17-24, 2004.
 - 15) 塚本利幸, 霜浦森平, 山添史郎, 野田浩資: 環境ボランティア活動の多様性と参加の規定要因ー参加意欲と参加経験のギャップをめぐってー, 福井県立大学論集, Vol.23, pp.73-90, 2004.
 - 16) 羽鳥剛史, 藤井聡: 地域コミュニティ保守行動に関する進化論的検討ー階層淘汰論に基づく利他的行動の創発に関する理論的分析ー, 社会心理学研究, Vol.24, No.2, pp.87-97, 2008.
 - 17) 西川正之(編), 高木修(監): 援助とサポートの社会心理学ー助けあう人間のこころと行動ー, 北大路書房, 2000.
 - 18) 塚本剛志: ボランティアの動機と文化的要素ースペインにおける予備的考察, 国際開発研究フォーラム, 32, 2006.
 - 19) 広瀬幸雄: 環境配慮的行動の規定因について, 社会心理学研究, Vol.10, No.1, pp.44-55, 1994.
 - 20) 杉浦淳吉: 環境配慮の社会心理学, ナカニシヤ出版, 2003.
 - 21) 安藤香織, 広瀬幸雄: 環境ボランティア団体における活動継続意図・積極的活動意図の規定因, 社会心理学研究, Vol.15, No.2, pp.90-99, 1999.
 - 22) 加藤潤三, 池内裕美, 野波寛: 地域焦点型目標意図と問題焦点型目標意図が環境配慮行動に及ぼす影響: 地域環境としての河川に対する意思決定過程, 社会心理学研究, Vol.20, No.2, pp.134-143, 2004.
 - 23) 元吉忠寛, 高尾堅司, 池田三郎: 地域防災活動への参加意図を規定する要因ー水害被災地域における検討ー, 心理学研究, Vol.75, No.1, pp.72-77, 2004.
 - 24) 藤井聡: 社会的ジレンマの処方箋ー都市・交通・環境問題のための心理学ー, ナカニシヤ出版, 2003.

(2011. 8. 5 受付)

A EXPLORATORY STUDY ON PRACTICAL BEHAVIOR FOR REDUCTION OF THE VULGARITY OF THE MASS :THE EFFECTS OF EXPERIMENT ALTRUISM BEHAVIOR ON REDUCTION OF THE VULGARITY OF THE MASS

Kyosuke IJICHI, FumihiroHARA and Satoshi FUJII

The authors' past study developed a scale measuring the spiritual vulgarity of the masses, based upon Ortega's "*The Revolt of the Masses*" (1930). The study indicated that the vulgarity of the masses might have a negative impact on urban landscape and consensus building around public works. In order to reduce one's vulgar disposition, we focused on "reading a good book". And it is indicated that "reading a good book" has the potential for reducing the vulgarity.

In thos report, we aimed to explore more practical measure for reducing one's vulgar disposition. We focused on volunteer activities as altruism behavior, and hypothesized that the experience of volunteer activities might reduce the vulgarity of the mass. To test this hypothesis, we carried out a questionnaire survey. The obtained data supported the hypothesis, however, it also indicated that the experience of volunteer activities cause undesirable effects for one's vulgar disposition in the group whose vulgar disposition is high.